

神奈川における旧石器時代の遺跡立地（その2）

－相模野第Ⅰ・Ⅱ期－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

神奈川県内、とりわけ県西部において行われている大規模道路工事に伴う発掘調査では、次々と旧石器時代の遺跡が発見されており、出土事例は増加の一途を辿っている。これまでは相模川の東側に位置する相模野台地が主なフィールドとして知られていたわけだが、前述のとおり、これまで発見事例の少なかった相模川以西域において出土事例は蓄積され、その実態が明らかになりつつある。ただし、それらの多くの資料は出土品整理を待つ状態であり、正式な報告は今後という状況である。このため、相模川以西において発見されている数多くの事例は、正式な調査報告書が刊行されてからの分析とし、現時点では相模野台地での出土事例を中心として、検討を進めることとする。

昨年度、相模野第Ⅲ期～第Ⅴ期の資料を対象として遺跡の分布や遺跡の立地について、QGISを用いて分析を加え、その結果を掲載した。今年度はその続編として、始良丹沢火山灰降灰以前の、古い段階である相模野第Ⅰ期と第Ⅱ期に該当する資料について、出来るだけ同じ視点で分析を加え、検討を試みた。昨年度と同様、今回の報告も、次に発展させるための第一段階の基礎的な報告となる。（大塚）

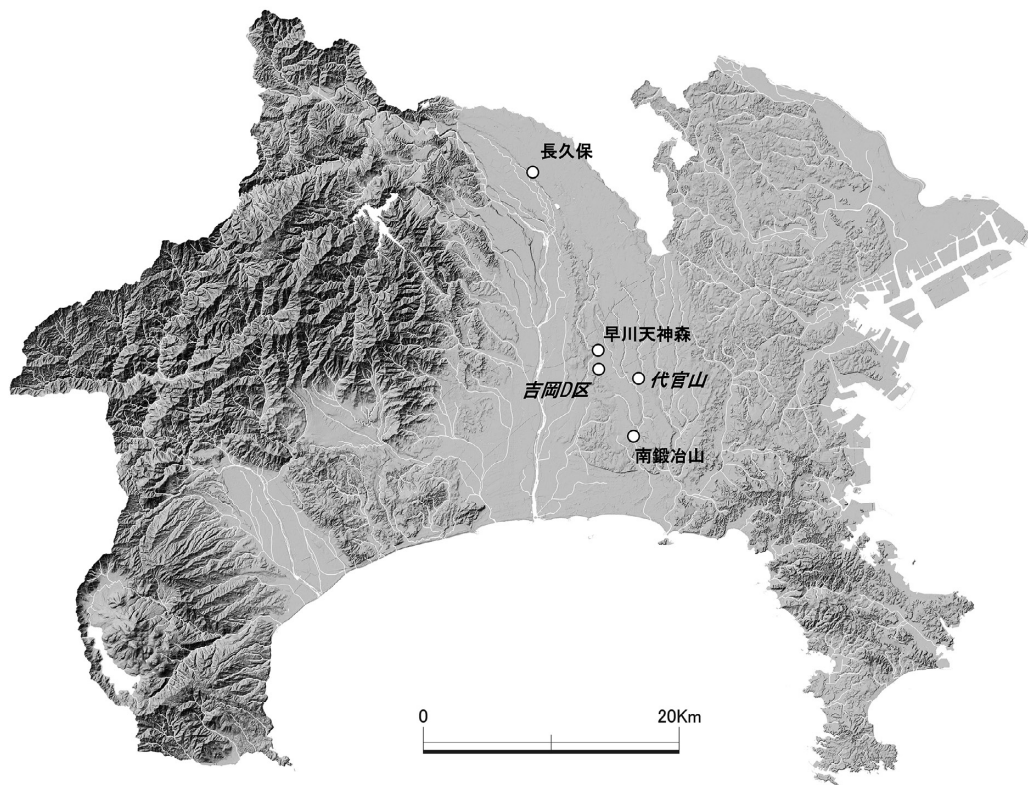
相模野第Ⅰ期

遺跡の分布

Ⅰ期は県内で最も古い段階であり、層位的には概ね相模野基本層序のL5層より下位の資料を取り上げている。この時期の遺跡はきわめて数が少なく、長久保、早川天神森、吉岡D区、代官山、南鍛冶山の5遺跡、6文化層を数えるのみである。また、出土石器も吉岡D区以外は、単品や数点の石器のみで、数量・内容とも希薄なため、石器群の詳細を明確に捉えることは難しい。遺跡の分布は、最北端の長久保遺跡が、姥川の左岸に、早川天神森と吉岡D区が目久尻川沿い、代官山と南鍛冶山が引地川沿いに点在しているに過ぎない。このように、現時点では相模川東岸の相模野台地を中心とする広範囲に点在するのみのため、分布の傾向を読み取ることは不可能といわざるを得ない。ただ、代官山や吉岡D区でみられるチャートや頁岩といった石材が相模野台地の北に続く多摩丘陵の多摩川水系から持ち込まれたと仮定したならば、相模野台地を南北に流れる相模川やその支流沿いに南下してきた人々の遊動の様子が窺える。

遺跡の立地

南の吉岡D区や南鍛冶山は高座丘陵（高座台地）、その他は相模野台地に位置する。ここでは、最も内容の濃い吉岡D区のB5層文化層の状況を検討することとする。吉岡D区B5層からは、台形様石器、ナイフ状石器、削器、彫器、UF、RF、剥片等計100点が、6ブロックから出土している。本ブロック群は、報告書によると「環状を呈するものと思われ」、谷を望む南西に張り出した台地緩斜面の縁辺部に立地している。谷部との比高差は約15mで、南西の開けた谷を見下ろす高台に位置している。北西の1ブロックに石器が集中し、それ以外の2～6ブロックは希薄な分布である。しかしながら、中央の5ブロックからは、炭化物集中が確認



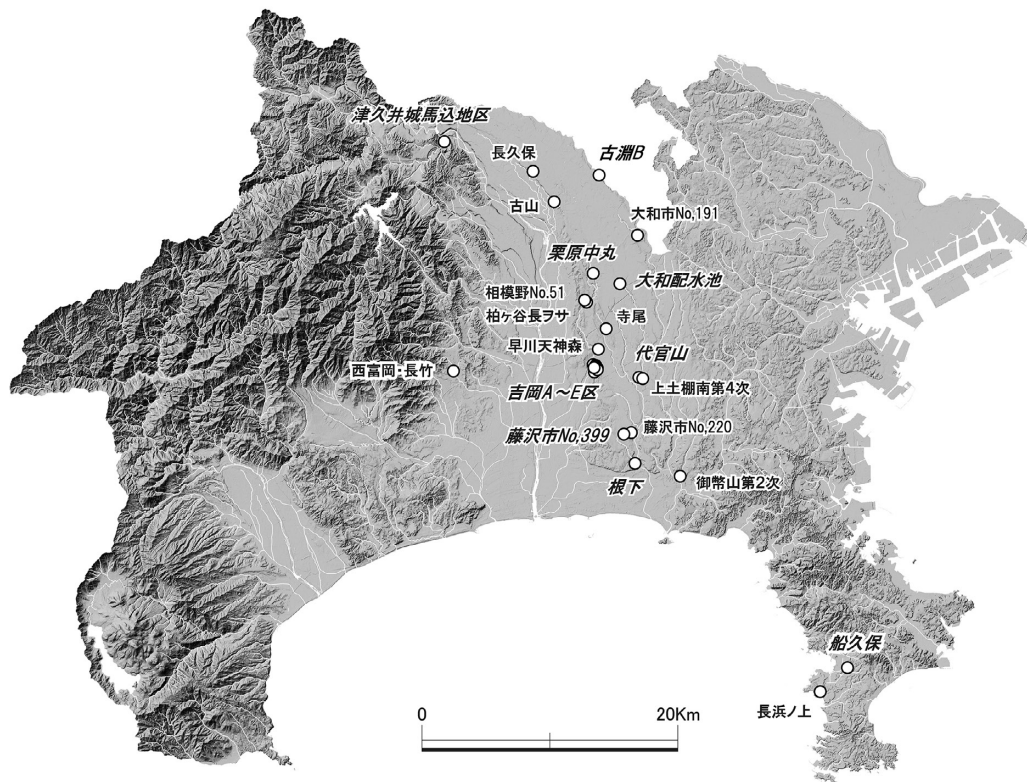
第1図 相模野第Ⅰ期の遺跡分布

され年代測定の結果、35040～33900calBPという値が得られている。吉岡D区B5層のあり方は、県内ではまだ発見例が少ないものの、後続する石斧を伴った石器群が主体となる環状ブロック群の萌芽を彷彿とさせる。

相模野第Ⅱ期前半

遺跡の分布

Ⅱ期前半は、概ねB4層を主体とし、石刃技法は見られるもののナイフ形石器は量的に貧弱で二側縁加工の明確な茂呂系ナイフ形石器の存在は確認できない。引き続き台形様石器や基部加工のナイフ形石器が目立つ。また、打製石斧や局部磨製石斧などが特徴的に組成する遺跡がある。この時期の遺跡は、津久井城跡馬込地区、古淵B、長久保、古山、相模野No.161、栗原中丸、大和配水池、相模野No.51、柏ヶ谷長ヲサ、寺尾、早川天神森、吉岡（A・B・C・D・E区）、代官山、上土棚南、相模野No.171、藤沢市No.399、根下、御弊山、船久保、長浜ノ上、西富岡・長竹の21遺跡32文化層を数える。このうち、西富岡・長竹は相模川以西の伊勢原台地、船久保、長浜ノ上は三浦半島に位置するが、それ以外は全て相模川東岸の相模野台地上に位置している。このうち古山、寺尾、早川天神森、長久保、相模野No.51の5遺跡は表採や単独出土で、層位もB4層（相模野No.51）・L5層（古山・寺尾・早川天神森）・B5層（長久保）と幅があり、判然としない。遺跡は概ね、相模野台地の中央付近にまとまる傾向があるものの、複数ブロックが出土し拠点的な遺跡は、北の津久井城跡馬込地区、中央の吉岡A区～D区、南の船久保と南北に点在する。まとまった規模の遺跡では、斧類が出土する傾向がある。因みに津久井城跡馬込地区、栗原中丸、大和配水池、吉岡D、藤沢市No.399、根下、船久保で打製石斧や局部磨製石斧といった斧類が出土している。



第2図 相模野第Ⅱ期前半の遺跡分布

遺跡の立地

ここでは、主な遺跡を中心に検討を試みたい。まず、北の津久井城跡馬込地区は、串川と概ね50mほどの比高差のある段丘上のやせ尾根に位置している。城山の山裾に当たり、東側には相模川が回り込んで眼下には相模野台地が一望できる。おそらく相模川を上ってくる当時の人々がランドマークとして捉えることのできる場所であったと思われる。ここでは小規模ながら7つのブロックによる環状ブロック群が形成され、黒曜石は神津島産と信州系が持ち込まれ、合流地点といった様相を呈している。斧類は、円環部と中央ブロックで発見された。また、環状ブロック群の南西約90mの距離に小規模なブロックが存在する。その他、山裾に立地する遺跡としては、伊勢原市の西富岡・長竹が近年調査されている。やはり、やせ尾根上の中央に位置するが、1カ所のブロックを検出したにとどまる。吉岡遺跡群は、下末吉層に比定される高座丘陵上にあり、目久尻川左岸の樹枝状台地に位置する。吉岡C区は、11ブロックがあたかも環状を呈するように分布し、谷を挟んだ東側のD区では、斧状の石器が出土している。C区の西側の台地にB区、東側の台地にはD区、南西の台地にA区、南東の台地にE区があり、B4層中よりの石器群が出土しており、中央のC区を拠点として、隣接する小規模な遺跡の存在がみてとれる。三浦半島の舟久保（第Ⅵ文化層）では、40カ所ものブロックが確認され、第1～第3のブロック群に分類され、環状ブロック群との関連性が指摘されている。報告では、Ⅰ期後半としているが、B4L層中心の出土ということなどからⅡ期前半で扱うこととする。第1ブロック群で局部磨製石斧が出土し、第3ブロック群で打製石斧が出土しているが、第2ブロック群に斧類は認められない。3つのブロック群には内容に偏りが見られるが、時期を違えて存在したのか、または相互補完的に同時存在したのか興味深い。なお、B4U層（Ⅴ文化層）からも台形様石器を伴う3ブロックが出土している。

まとめ

相模野第Ⅰ期は、その内容がきわめて希薄で判然としないが、吉岡D区B5層の石器群のように、相模野台地に確実に存在が認められる。その後、Ⅱ期前半になると遺跡数は相模野台地を中心に急増し、津久井城跡馬込地区、吉岡C区、船久保のように環状ブロック群を成す拠点的な遺跡がみられるようになる。相模野台地の中央付近では、吉岡C区のような拠点的な遺跡と小規模な遺跡が河川によって繋がる様子が窺える。

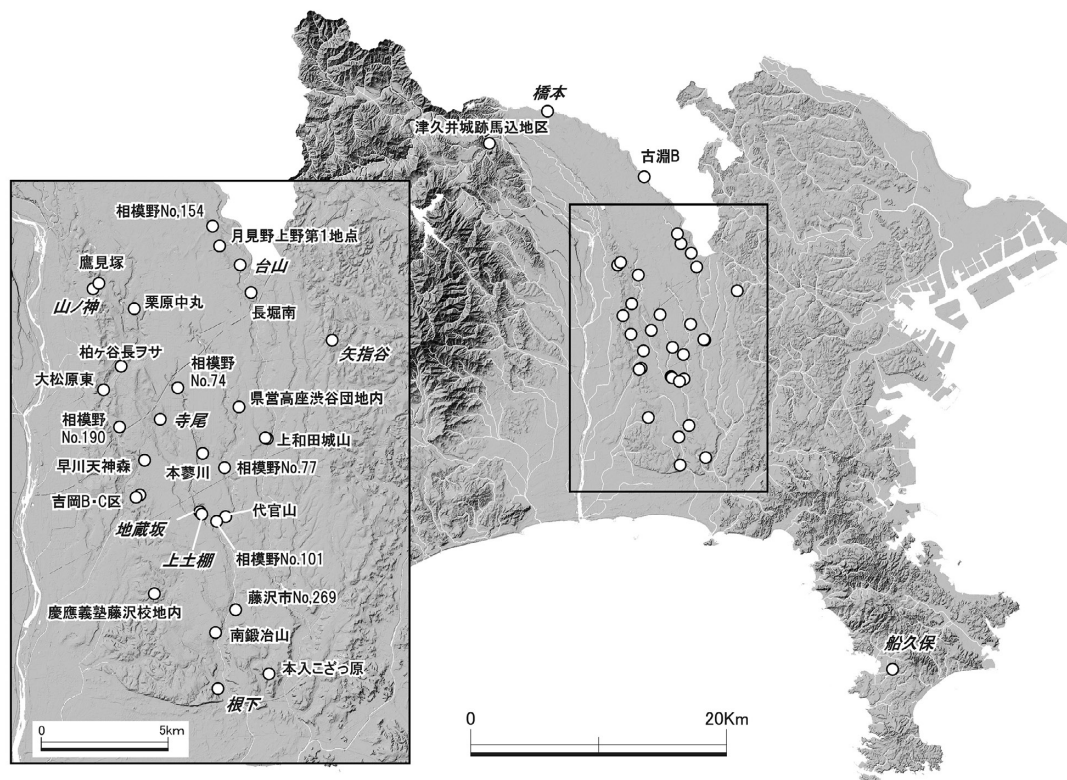
(畠中)

相模野第Ⅱ期後半

遺跡の分布

Ⅱ期後半の石器群は、概ねB3層から出土する石器群である。石器組成に石斧は含まれなくなり、ナイフ形石器・搔器・削器・彫器・揉錐器などの小形の石器が豊富に観察できるようになる。ナイフ形石器は、前半期に比べ数量が増え、調整は精緻になる。石斧は確認されなくなるものの、礫器・磨石・敲石などの大形石器は共伴する。

さて、この時期の遺跡数は、第Ⅱ期前半に比べ増加し34遺跡を数える（第3図）。各遺跡の分布状況は、相模野台地、取り分け北西方向から流れてきた相模川が南方向に向きを変える相模原市下溝付近よりやや南側の大和市・座間市以南地域、相模野台地の東端を流れる境川水系の月見野遺跡群周辺を中心に増加している傾向が確認される。但し、第Ⅱ期前半期と同様、北端には橋本遺跡、中津川と相模川の合流部近くでは津久井城跡馬込地区、相模野台地東端の多摩丘陵に接する位置には矢指谷遺跡、南東端の三浦半島には船久保遺跡の存在が確認されている。



第3図 相模野第Ⅱ期後半の遺跡分布

各遺跡の規模を確認すると、寺尾遺跡のみ突出して石器の出土量が多く1,898点を数える。しかし、寺尾遺跡以外にこのような大規模な遺跡は現時点では確認されていない。寺尾遺跡に次ぐ規模の石器の出土量が認められる橋本遺跡の石器の出土総数は231点ほどである。この2遺跡以外は、さらに小規模なものとなり、いずれの遺跡も出土石器の総数は160点未満であり、このうち、50点以上の石器の出土点数を数える遺跡は、台山・山ノ神・矢指谷・寺尾・地藏坂・上土棚・根下・船久保の8遺跡しか確認されていない。

また、寺尾遺跡では黒曜石の利用率が96.3%（1,829/1,898点）を占めているが、他の遺跡で黒曜石の利用割合が高い遺跡は、いずれも出土点数は小規模なもののみであり、寺尾遺跡の北西に位置する柏ヶ谷長ヲサ遺跡（19/44点：43.1%）、南南東に位置する上土棚遺跡（158/165点：95.7%）、三浦半島に位置する船久保遺跡（第2次調査 75/76点：98.6%）が上げられる。相模野台地上の3遺跡は、一定の距離間を有して分布しているが、特に3遺跡間や周囲の他遺跡との有機的な関連性は認められない。

遺跡の立地

各遺跡の分布については、前項で述べたように相模野台地の中央部付近からその南側に遺跡が集中していることが確認出来る。これは他の時期の石器群と同様、目久尻川・引地川・比留川・蓼川・目黒川・境川ほか小河川沿いに遺跡が立地していることが多い。また、各遺跡とも周囲の平坦面あるいは河川との比高差に約10m以上の差が存在するところが多く、且つ、周辺の小河川から延びる支谷が樹枝状に深く入り込んだ地形の上部に形成された平坦面あるいは緩斜面上に遺跡を形成する傾向が強い。よって、遺跡の立地している場所は、周辺から見られやすく、逆に周辺を観察しやすい環境であり、これはほぼすべての遺跡に共通した条件と考えられる。

このような中でも特徴的な遺跡がいくつか確認できる。津久井城跡馬込地区は中津川左岸に位置し、中津川と相模川が合流する手前、両河川に挟まれた地点に立地している。中津川から入り込んだ小支谷が樹枝状に入り込み、河床面との比高差は50mほどを測り、他の遺跡を圧倒している。山ノ神・矢指谷・船久保などの各遺跡のように丘陵の縁辺部に形成された遺跡も周辺河川までの比高差は津久井城跡馬込地区まではないものの、遺跡立地の効果としては、同様の状況にあったものと考えられる。

一方、2つの河川の合流地点に近い位置に立地している遺跡としては、上記の津久井城跡馬込地区のほか、地藏坂・上土棚遺跡が比留川と蓼川の合流部近くに位置しており、他の遺跡に比べ、周囲からはより目立つ場所に立地していると言える。

本時期は、津久井城跡馬込地区・山ノ神・矢指谷・船久保・地藏坂・上土棚遺跡は、上記のような状況から、当時のランドマーク的な様相を踏まえた立地であった可能性が高いと考えられる。しかし、左記以外の遺跡も前述のような状況を踏まえると、これらも津久井城跡馬込地区をはじめとする6遺跡ほどの効果は無いまでも、同様な目的を持った位置に立地する傾向を有していたものと考えられる。

まとめ

第Ⅱ期後半になると、相模川の流れが北西方向から南に変わるあたりから以南で遺跡数がさらに増加する。但し、出土石器数が1,800点を超える大規模遺跡は寺尾遺跡しか確認されず、全体的には遺跡の規模は小規模である。また、寺尾遺跡のように使用石材が黒曜石を主体とする遺跡も上土棚・柏ヶ谷長ヲサ・船久保（第2次調査）で確認されているが、これらの遺跡間のみに見られる分布や立地の共通性は見いだせない。遺跡の規模や非在地石材である黒曜石の使用割合は、当時の人々の生活や移動傾向などを考える上で1つの重要な視点であると考えられるが、現段階では、これを具体的に読み取ることは出来なかった。

しかし、津久井城跡馬込地区や丘陵の縁辺部に位置する山ノ神・矢指谷・船久保、二河川の合流部近くに立地する地蔵坂・上土棚遺跡は、ランドマーク的な要素が強いものと考えられるが、他の遺跡の立地も周囲との比高差や樹枝状に入り込んだ支谷の上面にある狭い平坦面や緩斜面上に立地しているという状況も、その効果は津久井城跡馬込地区ほど高くはないものの、ランドマーク的な要素を十分有しているものと考えられ、これがこの時期全体の遺跡立地の特徴と考えられるのではないだろうか。

今後、県西部の発掘調査成果なども増加し、より広範囲に精緻な検討が加えられることに期待したい。

(栗原)

相模野Ⅰ期からⅡ期前半の遺跡立地とその類型

列島内における旧石器時代研究の新たな動向を踏まえた出現期の遺跡立地類型は、集中地点を検出した遺跡でありⅠ期～Ⅱ期前半を中心とする。集中地点の表現は「散布範囲：scatter」(野口2022 pp.5)として再考を促すが、ここでは従来通りとした。また、編年の基軸は相模野・武蔵野各台地と多摩丘陵の編年比較(三瓶2000)にある。

吉岡遺跡群D区BB5層「台地緩斜面の縁辺部」(白石・加藤編1996 pp.13)東側、同遺跡群A区BB4上部「丸尾根状丘陵部の頂上南東側」(砂田・縄野編1996 pp.43)、同遺跡群B区BB4上部層「谷を見下ろす丘陵縁辺部」(同 pp.104)、同遺跡群E区BB4上部層「丘陵頂上部」(同 pp.109)の北側である。

大和配水池内遺跡L5層は東側への緩斜面と北東の浅い埋没谷に狭在する台地端部にある(麻生編2008)。船久保遺跡第5次調査BB4下部層は「埋没谷の底部」「丘陵部」「谷戸部」(前川ほか2020)の3ヵ所で尾根上からの緩斜面である。津久井城馬込地区A区BB4層は北東に伸びる丘陵尾根東側緩斜面(畠中ほか2010)に立地している。

西富岡・長竹遺跡第3次調査BB4層は「やせ尾根状台地の南西面」の「ゆるやかに傾斜する地形」(麻生2019 pp.3)に位置し、Ⅱ期後半矢指谷遺跡BB3層は丘陵頂上部から東尾根緩斜面(廣瀬・乾・鹿島編1985)に立地する。

さらに、国指定史跡鈴木遺跡総括報告書では、遺跡内での最初の人類の足跡であるXB層は「他の11文化層と違い立地が谷奥部中心ではなく、周辺部の南東区に見られるという点で特異である」(小川・高田編2020 pp.217)。

また、愛鷹南麓の井出丸山遺跡(高尾・原田編2011)は列島最古37,700calBPであり、その遺跡立地は「複雑に埋没した小支谷が入り込み、さらに細い尾根に分断」された「僅かにテラス状に平坦面を持つ微地形」(同 pp.6)にある。

九州出現期の沈目遺跡の南分布域は「尾根部から南側の埋没谷」(清田・谷川2002 pp.15)の占地である。

相模野台地では石刃技法の出現が周辺域に比較し遅れるが(高屋敷2020)、36,600calBPの香坂山遺跡は「大型石刃+小石刃+尖頭器を基本とするユーラシアIUP石器群」として評価する(国武2021b pp.43)。また、遺跡立地は「東西方向の尾根の中心軸から南側」(国武2021a pp.3・国武編2021)に位置している。

こうした、相模野台地をはじめとする列島内の旧石器時代出現期当初から遺跡の多くが「尾根筋」あるいは「尾根上を含む緩斜面」に立地している。X層文化層序の分離に成果を上げた武蔵台遺跡では、X層下部が上部に比較し集中地点が「相対的に狭い範囲」(織田2019 pp.219)とする指摘は、出現期においてもより古期の遺跡が尾根上から緩斜面といった遺跡立地に始まる自ずと狭小な範囲とならざるを得ない状況を示している。相模野台地L4層以下の「各遺跡間はある一定の距離を保って存在」(栗原2008 pp.70)した理由は小規模集団占地戦略が背景にある。

こうした尾根上立地は周辺環境への見通しの良さと行動の迅速さの効果を高めることが予測される。さら

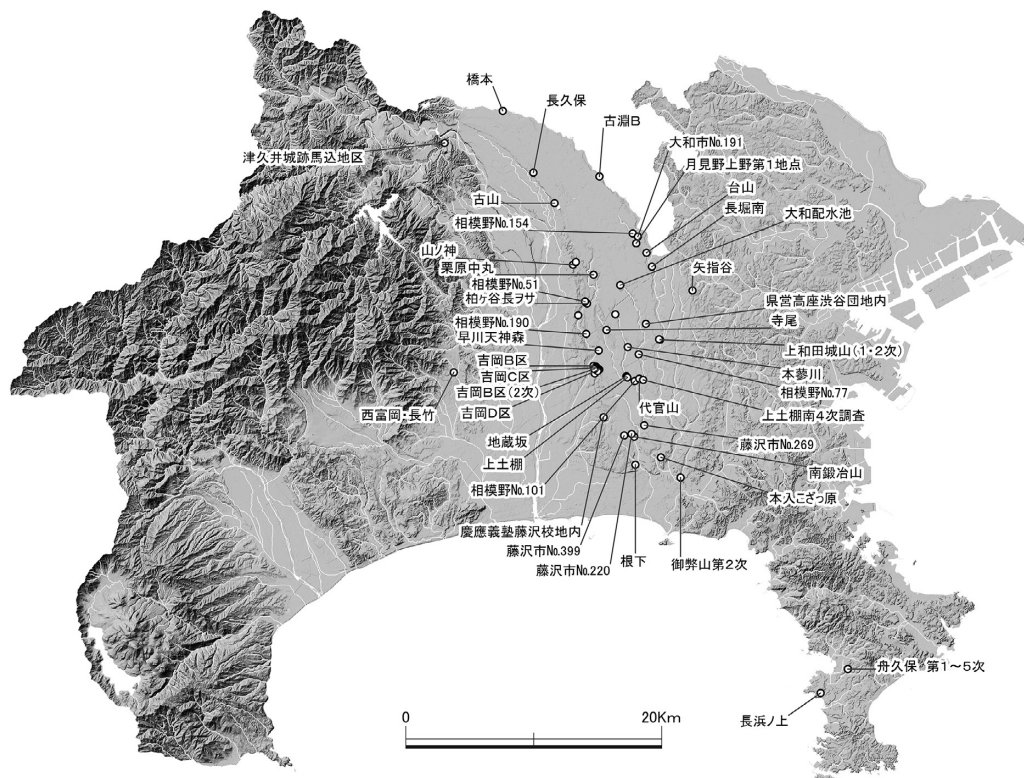
神奈川における旧石器時代の遺跡立地（その2）

には、狩猟対象としてのシカ・イノシシをはじめとする中小型動物のケモノミチでもあり、「尾根沿いはシカの植物供給という点で山地帯の森林よりも好適」（高槻・梶谷2019 pp.8）なのである。あるいは水資源や風向きなどを考慮した尾根上に隣接したヌタ場集まる中小動物を目的とした遺跡立地も考えられよう。また、時代は下るがBB3層の陥し穴は円形が方形より1,000年遡る年代測定（麻生2021）も狩猟対象獣の変化を考える上でも示唆的である。

遺跡の立地類型（砂田1997 pp.11）では、遺跡を取り巻く流域小河川あるいは埋没谷の位置付けによってAからGの7類型としている。河川へ降下すればABC各類型の河川による遺跡囲繞型も該当しようが、今回概観した出現期の遺跡立地は入植当初の尾根上往還路であり、DEFG各類型に相当するが、さらなる考察が必要である。（砂田）

おわりに

令和2年度より「神奈川における旧石器時代の遺跡立地」と題して神奈川県内の報告された遺跡について集成・分析を行っている。昨年度は相模野Ⅲ～Ⅴ期と調査数の多い時期であることから、石材組成や器種組成、ナイフ形石器と槍先形尖頭器の関係など気に留まる視点に基づき、様々な空間分析を行った。結果、便宜的に使用するが「大規模」遺跡と「小規模」遺跡の位置関係やその立地などについて特筆できる点を抽出することができた。今年度は昨年度の流れを受けて、相模野Ⅰ・Ⅱ期を実施した。しかしながら自明ではあるが、調査事例の数が少ないことから、踏み込んだ空間分析を実施するデータ数には至らず、事例紹介にとどまっている。今年度を以て一応全時期にわたり見渡した形となることから、今後これらのデータをもとに隣接地域の情報も視野に入れた検討を行っていく予定である。（三瓶）



第4図 相模野第Ⅰ期・第Ⅱ期分析対象遺跡位置図

【引用・参考文献】

- 麻生順司 2006「上草柳遺跡群大和配水池内遺跡の調査」『大和市史研究32』pp. 1-14 大和市役所総務部
- 麻生順司編 2008『神奈川県大和市上草柳遺跡群大和配水池内遺跡Ⅰ発掘調査報告書—本文編—』p. 346 大和市No. 199 遺跡発掘調査団
- 麻生順司 2021「神奈川県三浦半島における旧石器時代前半期の陥し穴」『神奈川を掘るⅣ』pp. 1-32 玉川文化財研究所
- 麻生順司・御代七重・小池聡・小林義典・丸吉繁一 2019『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書74西富岡・長竹遺跡第3次調査県道603号（上粕屋厚木）道路改良工事に伴う発掘調査』pp. 1-376 玉川文化財研究所
- 小川望・高田賢治編 2020『小平市埋蔵文化財発掘調査報告書第58集鈴木遺跡発掘調査総括報告書』pp. 1-238小平市教育委員会
- 織田識好 2019「武蔵野台地における後期旧石器時代初頭の編年と行動論—武蔵台遺跡の分析を中心に—」『旧石器研究第15号』pp. 107-122 日本旧石器学会
- 清田純一・谷川亜紀子 2002『城南町文化財調査報告第12集 沈目遺跡』pp. 1-230 城南町教育委員会
- 国武貞克 2021a「ユーラシア大陸の初期石刃石器群と長野県香坂山遺跡」『岩宿フォーラム2021 日本列島における石刃石器群の出現 予稿集』pp. 3-16 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 国武貞克 2021b「日本列島最古の石刃石器群の発見—長野県佐久市香坂山遺跡の学術目的の発掘調査—」『古代文化73-3』pp. 42-52 公益財団法人古代学協会
- 国武貞克編 2021『中央アジア旧石器研究報告 第7冊 香坂山遺跡 2020 年発掘調査成果報告書』pp. 1-205 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 栗原伸好 2008「相模野台地における旧石器時代の遺跡分布について」『岩宿フォーラム2008 更新世の地形発達史と遺跡群の形成予稿集』pp. 68-73 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会
- 白石浩之・加藤千恵子編 1996『かながわ考古学財団調査報告7吉岡遺跡群Ⅱ旧石器時代1 AT降灰以前の石器文化 綾瀬浄水場建設にともなう発掘調査』pp. 1-216 財団法人かながわ考古学財団
- 砂田佳弘 1997「遺跡群の空間分布」『研究紀要2かながわの考古学』pp. 11 神奈川県立埋蔵文化財センター・財団法人かながわ考古学財団
- 砂田佳弘・縄野匡哉編 1996『かながわ考古学財団調査報告6吉岡遺跡群Ⅰ旧石器時代1 AT降灰以前の石器文化 綾瀬浄水場建設にともなう発掘調査』pp. 1-133 財団法人かながわ考古学財団
- 高尾好之・原田雄紀編 2011『沼津市文化財調査報告書第100集井出丸山遺跡発掘調査報告書』pp. 1-120 沼津市教育委員会
- 高槻成紀・梶谷敏夫費 2019「丹沢山地のシカの植生—長期的に強い採食圧を受けた生息地の事例—」『保全生態学研究』pp. 1-13
- 高屋敷飛鳥 2020「石刃技法の出現—南関東地方～愛鷹山麓を中心に—」『愛鷹山麓の旧石器文化』pp. 225-254 啓文舎
- 野口淳 2022「総論旧石器時代大規模遺跡論」『月刊考古学ジャーナル764』pp. 3-5 ニュー・サイエンス社
- 畠中俊明・澁谷正信・櫻井真貴・小川岳人・鈴木次郎・砂田佳弘・中田英・宮坂準位地 2010『かながわ考古学財団調査報告249津久井城馬込地区 津久井広域道路建設事業に伴う発掘調査』pp. 1-583 財団法人かながわ考古学財団
- 廣瀬有紀雄・乾哲也・鹿島保宏 1985『矢指谷遺跡発掘調査報告—横浜西武地域総合病院建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』pp. 1-179 横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 前川昭彦・戸田哲也・麻生順司・石川真紀・井澤純 2020『神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書77 船久保遺跡第5次調査 県道26号（横須賀三崎）三浦縦貫道路Ⅱ期工事に伴う発掘調査』pp. 1-284
- 三瓶裕司 2000「相模野台地・武蔵野台地・多摩丘陵の編年区分」『研究紀要5かながわの考古学』pp. 14-15 財団法人かながわ考古学財団